

「マルチスピーシーズ人類学」研究会

人類学は、この20年ほどのあいだに、文化表象をめぐる議論から、動植物やモノなどを含む自然と人間が絡まりあって生みだす世界をめぐる学問へと、その研究の方向を大きく転換させてきた。人類学は、いま、人間を超え出たところから人間について語る学問へと大きく生長を遂げつつある。その中心に位置するもののひとつが、異種間の創発的な出会いを取り上げ、人間を超えた領域へと人類学を拡張しようとする「マルチスピーシーズ人類学」である。本研究会では、複数種のあり方を取り上げて、種=横断的な絡まり合いを主題化する人類学の調査研究を発表し、討議する。

【幹事】 石倉敏明（秋田公立美術大学） 大村敬一（大阪大学） 大石高典（東京外国語大学）
奥野克巳（立教大学） 近藤祉秋（北海道大学） シンジルト（熊本大学）
相馬拓也（早稲田大学）

第4回研究会

2016年11月27日(日)
13:00~18:30

東京外国語大学
本郷サテライトキャンパス
4階セミナー室

文献レビュー

① Lorimer, J., Sandom, C., Jepson, P., Doughty, C., Barua, M. and Kirby, K. (2015) 'Rewilding: Science, practice and politics'

② van Dooren, T. (2010) 'Pain of Extinction: The Death of a Vulture'



トポロジー的往還としての獣害問題：宮崎県椎葉村における種=横断的交渉をめぐる 合原 織部（京都大学大学院） 【発表概要】 ジョン・ナイトは、日本の獣害問題を、山村で過疎化が進んだ結果、人的活動が縮小し野生の自然が人間の領域へと侵犯する現象であると説明する。すなわち、獣害とは、里と山の領域の境界をめぐる問題として捉えられる。本研究では、椎葉村を対象に、獣害を契機とする、猟師、猟犬、シシやシカの領域間の移動の諸相に着目する。集落に進出するシカ、限界集落において獣害に悩まされながらも耕地を手放さず土地が山に戻らぬよう耕作を続ける老人たち、そして害獣駆除のために山へと分け入る猟師と犬。それらの事例から、里における耕作や山での狩猟という行為のなかで、各領域に特有の種横断的交渉が生じ、各々の属性が変化するさまを考察したい。



オランダ再野生化地域OVPにみる環境倫理：体系的価値の考察 戸張 雅登（立教大学 大学院）

【発表概要】 ロルストン(Holmes Rolston III, 1991)はイエローストーン国立公園への灰色オオカミ再導入に見られる生態系復元を題材に、自然は動物個々の命ではなく、生態系全体のバランス維持に価値があるという体系的価値を唱えた。筆者はオランダ、アムステルダム近郊の再野生化地域OVP (Oostvaardersplassen)における議論—越冬できずに飢え死にしている牛や鹿を見殺しにするべきか安楽死に導くべきか—を取り上げ、再野生化された環境下で体系的価値は適応されるのかをレオポルドの土地倫理とロルストンの種間倫理を対比させつつ考察する。



ニホンミツバチの養蜂におけるマルチスピーシーズな関係—送粉共生系の人類学に向けた研究構想 大石 高典（東京外国語大学）

【発表概要】 養蜂は、植物と動物が長い時間をかけて築いてきた送粉共生関係を人が巧みに利用することによって成り立つ多種間相互作用である。群れを移動させず、地域内で放し飼いにする在来種をもちいた養蜂はまた、局所的な景観変化と同時に気候変動のような全球的な環境変動をも敏感に反映する。本発表では、日本列島で唯一、在来のミツバチのみが棲息している長崎県対馬を事例に、農林業政策の変化や気候変動のもとで、人、ニホンミツバチ、天敵（外来スズメバチ、病原ウィルスなど）、蜜源植物、野生動物が織りなすマルチスピーシーズな関係をどのように民族誌として描き出すことができるかについて、仮説的に提示してみた。



【問い合わせ先】 奥野克巳: katsumiokuno@rikkyo.ac.jp

大石高典 takanori@tufs.ac.jp

【URL】

<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/katsumiokuno/multi-species-workshop.html>